

日本財団自殺意識調査2016 (結果概要)

報告書公表時資料

2017年3月1日

日本財団における自殺対策事業

自殺対策基本法改正 H28年 4月

日本財団 いのち支える自殺対策プロジェクト



自殺対策

モデル自治体構築

日本財団・ライフリンク・自治体



調査

啓発・対策への提言

9月10日世界自殺予防デー

自殺対策の地域モデルを全国へ

調査概要

目的

日本全国における自殺念慮と自殺未遂の実態を明らかにすることで、自殺対策の必要性について社会の機運を醸成し、自殺対策の推進に寄与すること

対象

全都道府県20歳以上の男女
(20～50代の各年代、60～64歳、65歳以上)

回収数

回収数: 44,255 有効回答数: 40,436

期間

2016年8月2日(火)～8月9日(火)
(プロジェクト開始日: 6月22日)

方法

インターネット調査
「あなたご自身に関するアンケート」

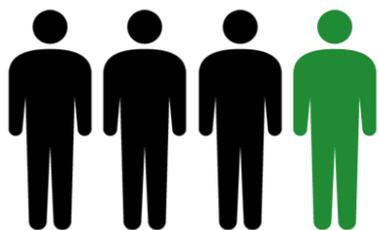
調査概要

調査項目

- (1) 基本属性(Q1～3)
- (2) 心に関する尺度、社会とのつながり、自己有用感、問題解決能力について(Q4～19)
- (3) ライフイベント(現在、過去の出来事、これまでに経験したこと)について(Q20, 21)
- (4) 身近な人間関係について(Q22～27)
- (5) 居住形態、就学・就業、健康状況について(Q28～38)
- (6) 死生観、自殺に関する意識・経験について(Q39～50)
- (7) 家計の状況について(Q51～53)

調査結果<10のファクト>

1



4人に1人が

「本気で自殺したいと考えたことがある」

2

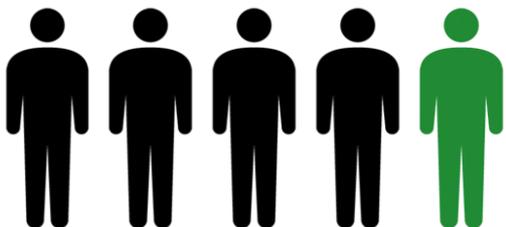


自殺未遂経験者は

全国53万人超

(推計)

3



5人に1人が

身近な人を自殺で亡くしている

調査結果<10のファクト>

自殺念慮や自殺未遂のリスクが高い人は

4

身近な人を自殺で
亡くした人

他者は頼れず、
人間同士は理解・共感
できないと考えている

理想と現実の幸福感
のギャップが大きい

死への恐怖感が低く、
生を全うさせる意志が希薄

5

若者層(20~39歳)は

最も自殺念慮や自殺未遂の
リスクが高い世代



調査結果<10のファクト>

6

自殺のリスクを
高める要因は
家族等からの虐待
生活苦
家族の死亡
アルコール依存
負債(多重債務等)など



7

自殺のリスクを
抑制する要因は
自己有用感
社会的問題解決力
共感力



8

**住み続けたい人が
多い地域は**
自殺念慮や自殺未遂
のリスクが低い地域



調査結果<10のファクト>

9



本気で死のうと思ったものの
思いとどまった理由

10

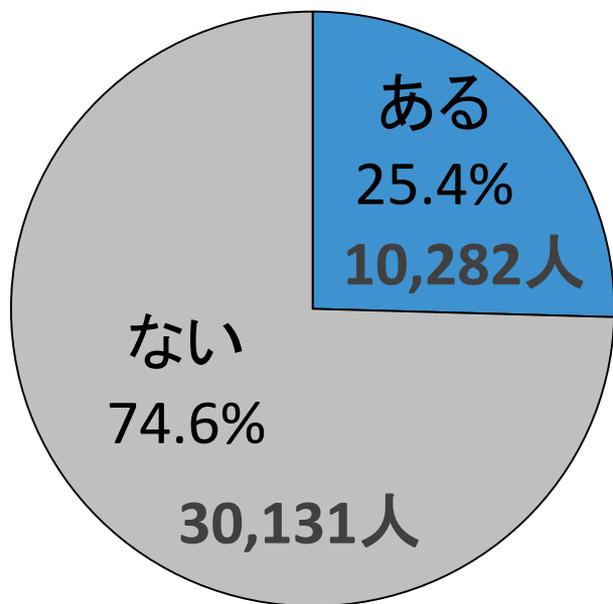


半数以上が
自殺念慮や自殺未遂を経験しても
相談しない

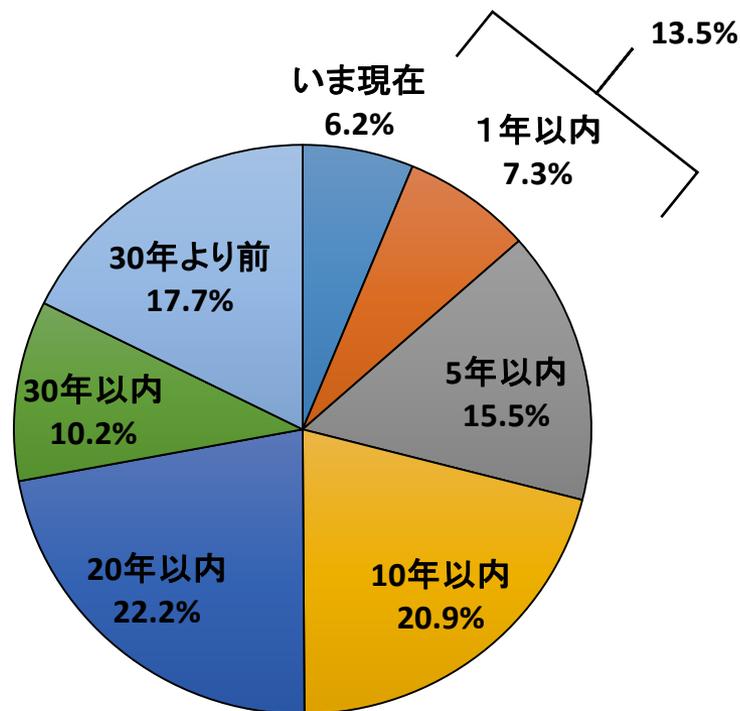
1 4人に1人が「本気で自殺したいと考えたことがある」

25.4%が「本気で自殺したいと考えたことがある」
(以下「自殺念慮あり」)

「過去1年以内」: 13.5% (全体の3.4%)
うち「いま現在」: 6.2% (全体の1.6%)

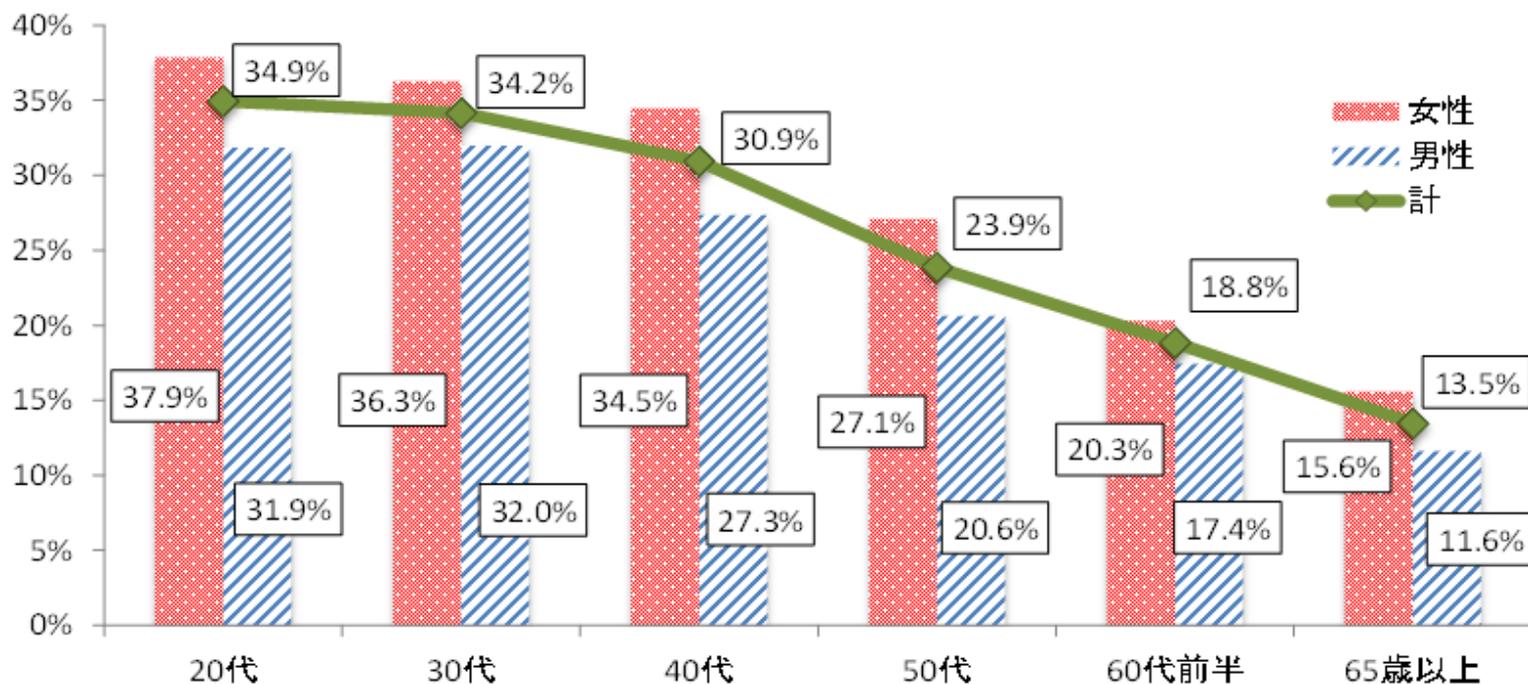


自殺念慮の有無



自殺念慮の時期

自殺念慮は
▼若年層が高い
▼女性(28.4%)が男性(22.6%)に比べて有意に高い
自殺念慮(年代別)

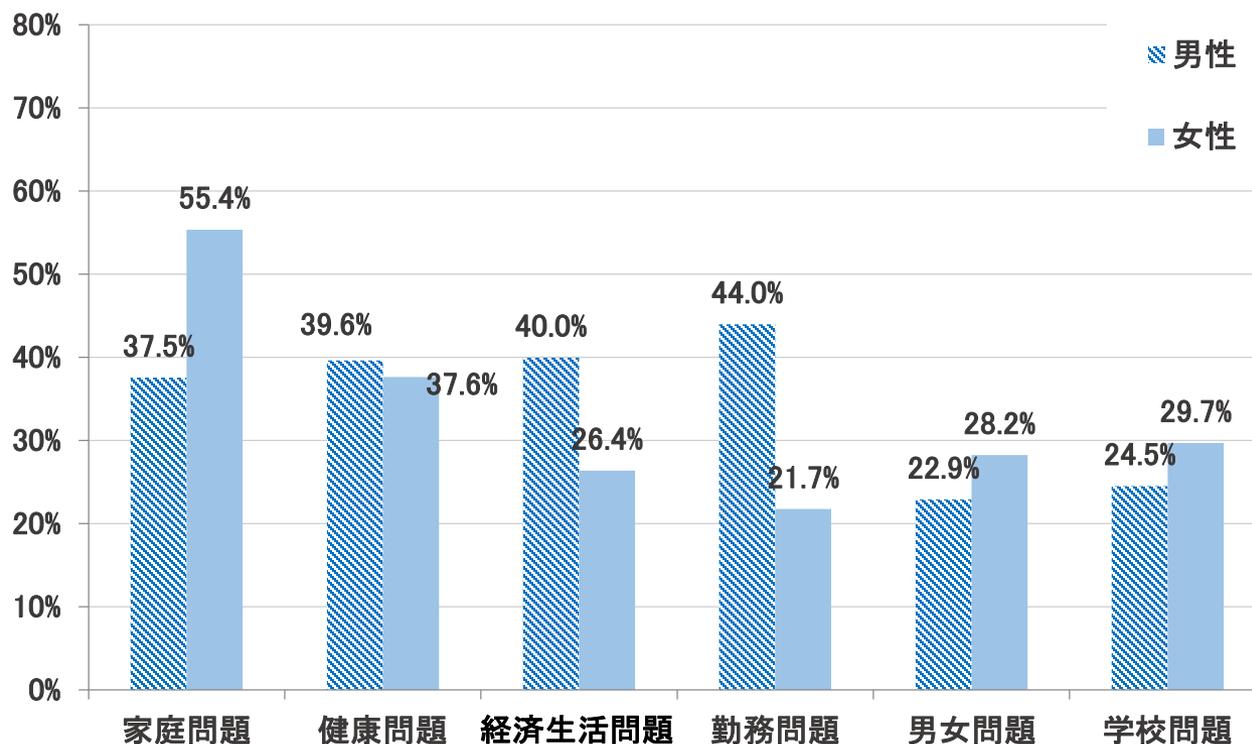


4人に1人が「本気で自殺したいと考えた」:原因

複合的な原因が重なって自殺念慮に至った

自殺念慮者の66.0%が2つ以上の原因で自殺を考えた

自殺念慮の原因(性別・時期問わず)



2 自殺未遂経験者(過去1年以内)は全国推計53万人超

**過去1年以内の自殺未遂経験者
推計53万5,000人**

男性:26万4,000人

女性:27万1,000人

※標本誤差を踏まえた推計は
総数:45万人6,000人～60万7,000人

【推計方法】本調査から性別・年齢別自殺未遂率を算出し
その自殺率に最新の平成27年国勢調査の結果を掛け合わせて推計

自殺未遂経験者は全国推計53万人超：年代別

年代別の自殺未遂経験者推計（過去1年以内）

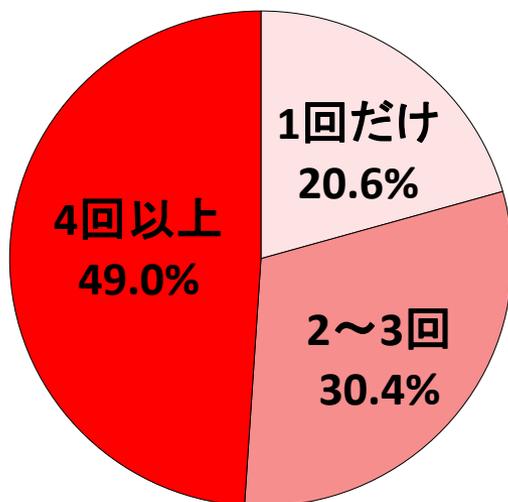
20代	15万1,000～23万4,000人
30代	12万8,000～20万4,000人
40代	7万2,000～13万2,000人
50代	2万1,000～5万7,000人
60～64歳	2,000～1万8,000人
65歳以上	4,000～4万1,000人

自殺未遂経験者（1年以内）の未遂回数

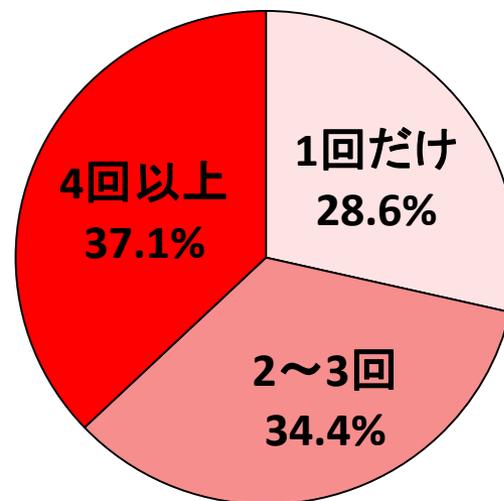
女性：49.0%が4回以上

男性：37.1%が4回以上

女性

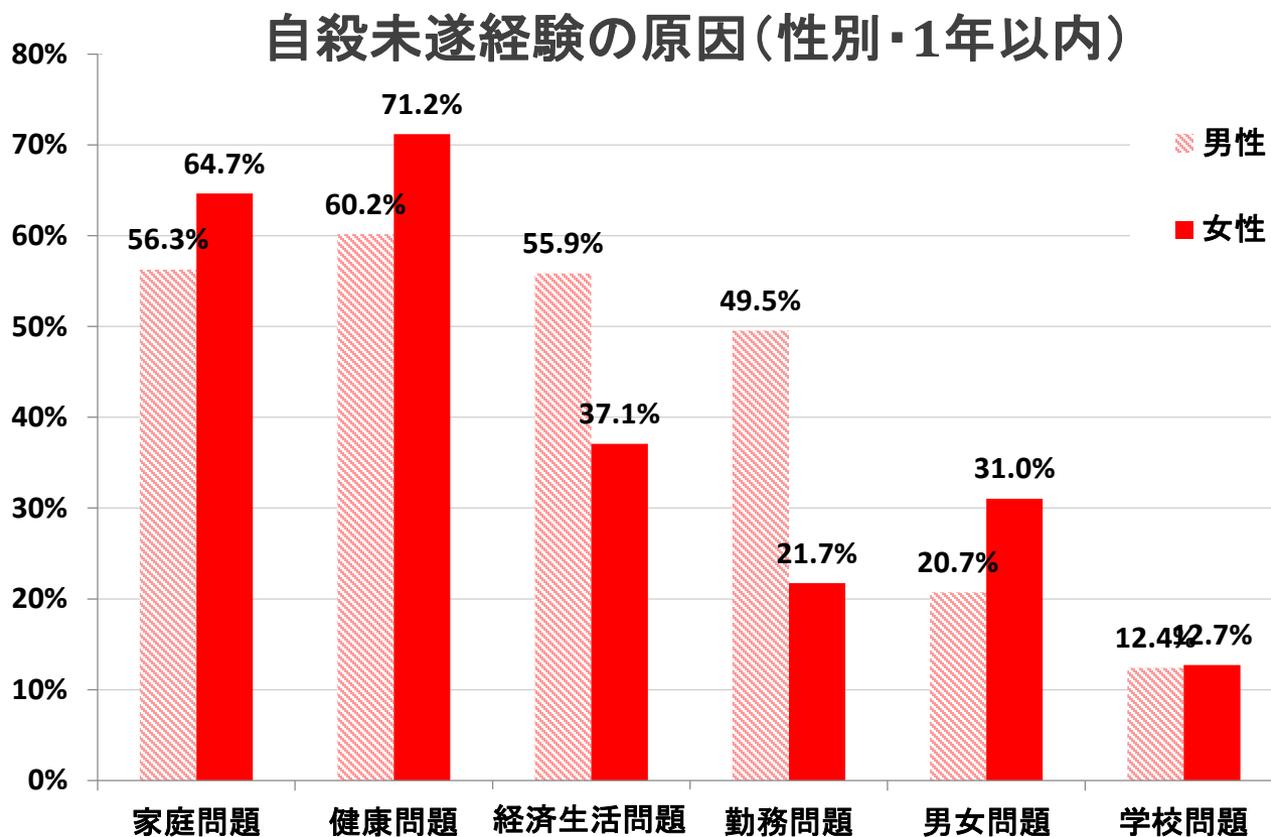


男性



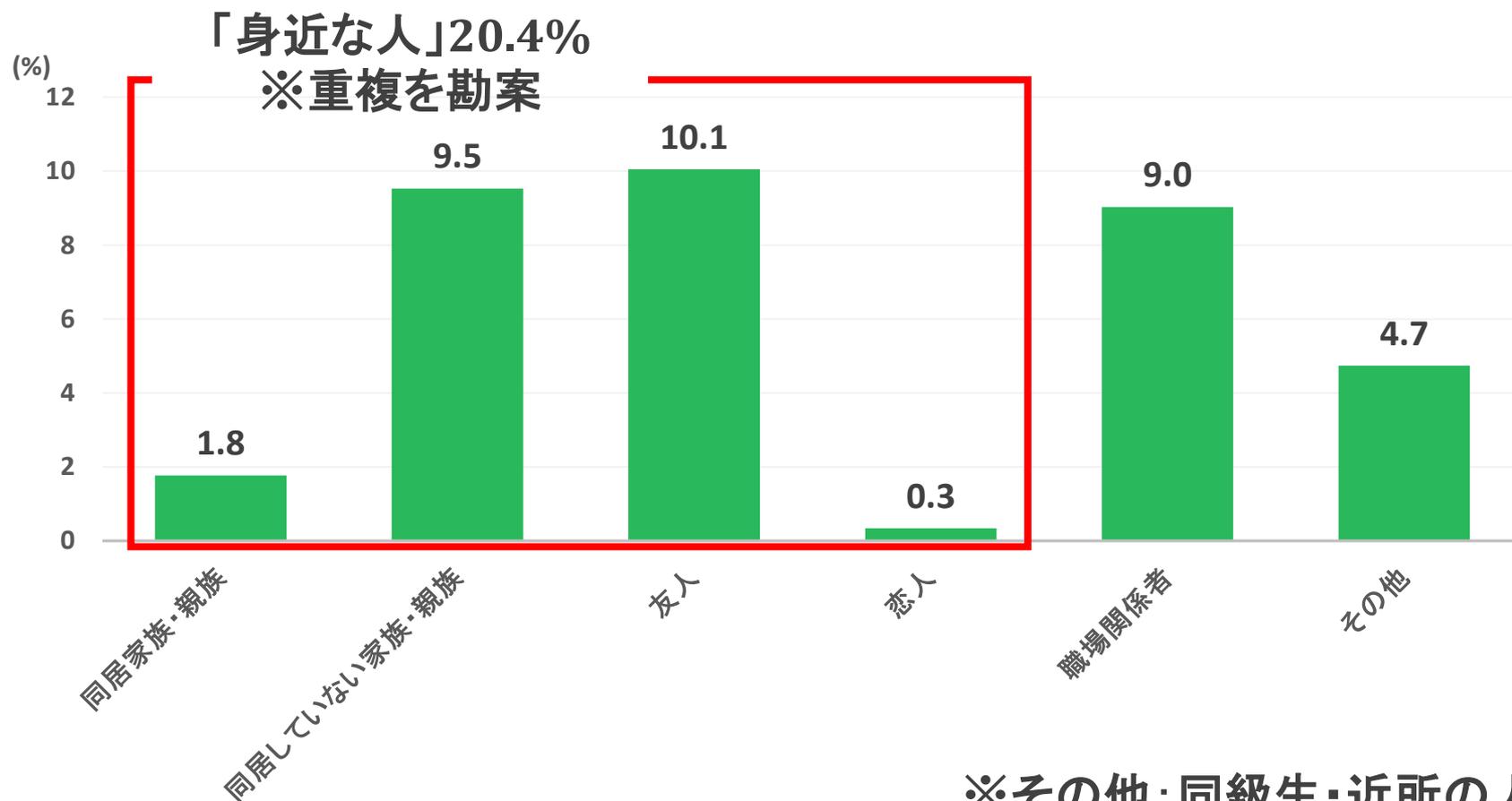
複合的な原因が重なり自殺未遂に至った

自殺未遂経験者（1年以内）の
82.6%が2つ以上の原因で未遂に至った



5人に1人が身近な人を自殺で亡くしている

自殺で亡くした「身近な人」とは
家族(11.3%)、友人(10.1%)、恋人(0.3%)

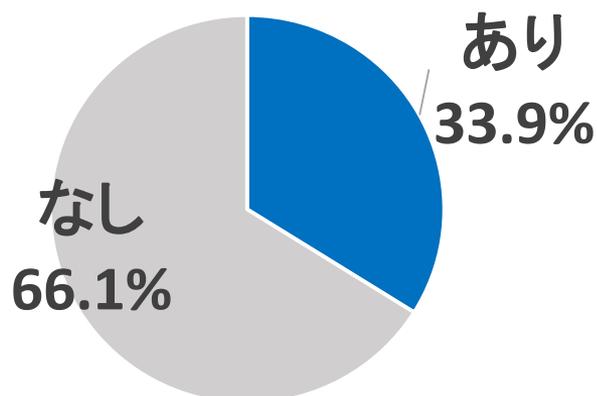


※その他:同級生・近所の人等

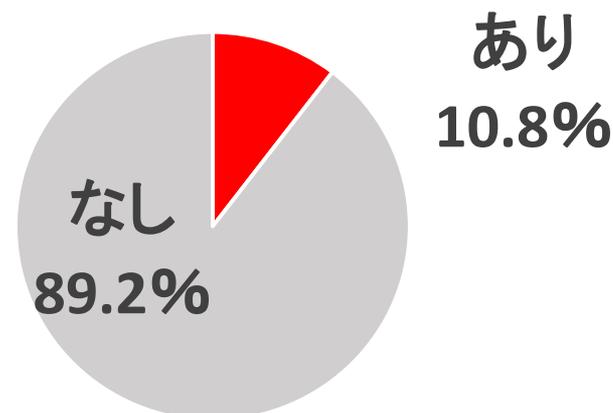
5人に1人が身近な人を自殺で亡くしている

「身近な人を自殺で亡くした人」の
33.9%が自殺念慮を抱き(全体平均:25.4%)
10.8%が自殺未遂を経験している(全体平均:7.0%)

自殺念慮の有無



自殺未遂の経験

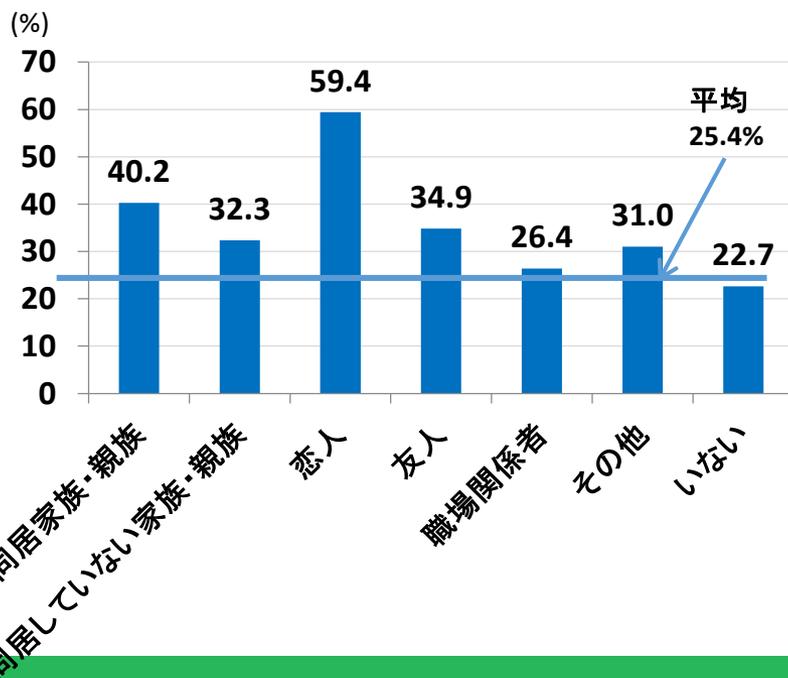


5人に1人が身近な人を自殺で亡くしている

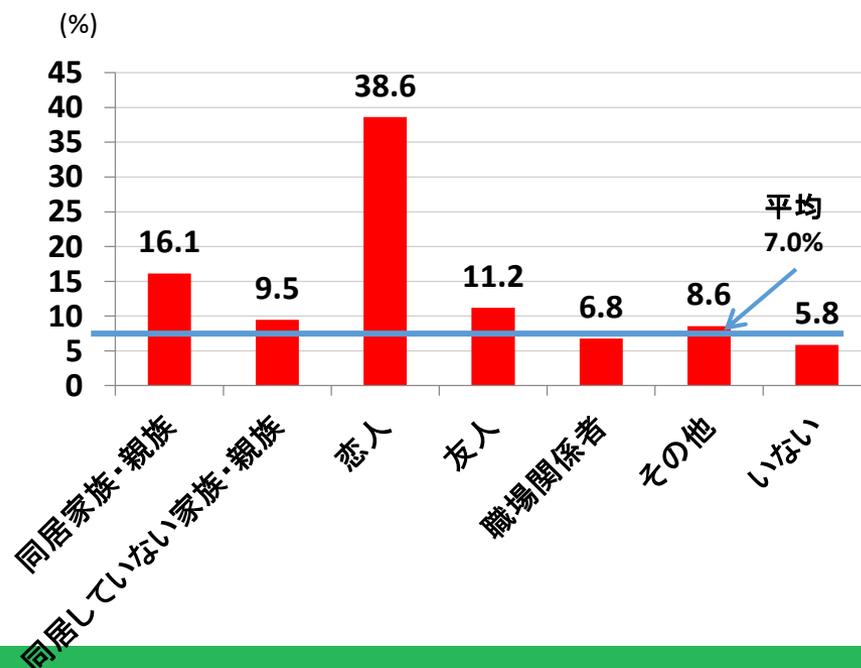
「恋人を亡くした人」
自殺念慮59.4% 自殺未遂経験38.6%

「同居している家族を亡くした人」
自殺念慮40.2% 自殺未遂経験16.1%

自殺念慮の有無



自殺未遂の経験



自殺念慮・自殺未遂のハイリスクグループ

失業
女性

配偶者との死別・離別・別居
家族と同居

他者に頼ることができず
人間は理解・共感できないと思っている人

死に対する恐怖感が低い人
生を全うする意思が弱い人

理想と現実の幸福感のギャップが大きい人

自殺念慮・自殺未遂のハイリスクグループ

自殺未遂のハイリスクグループ

※自殺未遂経験者(1年以内)と自殺未遂経験がない人との比較

	調整済オッズ比
失業	1.75
配偶者死別	1.47
配偶者離別	1.28
恋人あり	1.20
家族と同居	1.14
女性	1.12

自殺念慮・自殺未遂のハイリスクグループ 孤独感

他者に頼ることができず
人間同士は理解・共感できないと思っている人
(質問 6,7: 孤独感の類型判別尺度(LSO) 孤独感類型:C型)

落合による孤独感の4類型

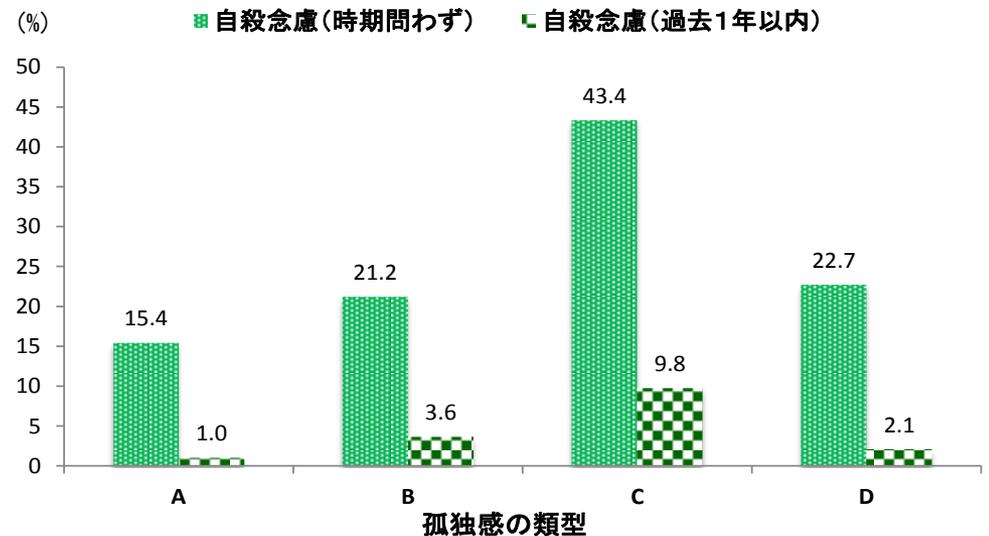
人間の個別性

気づいていない(他者も)

気づいている(自分だけ)

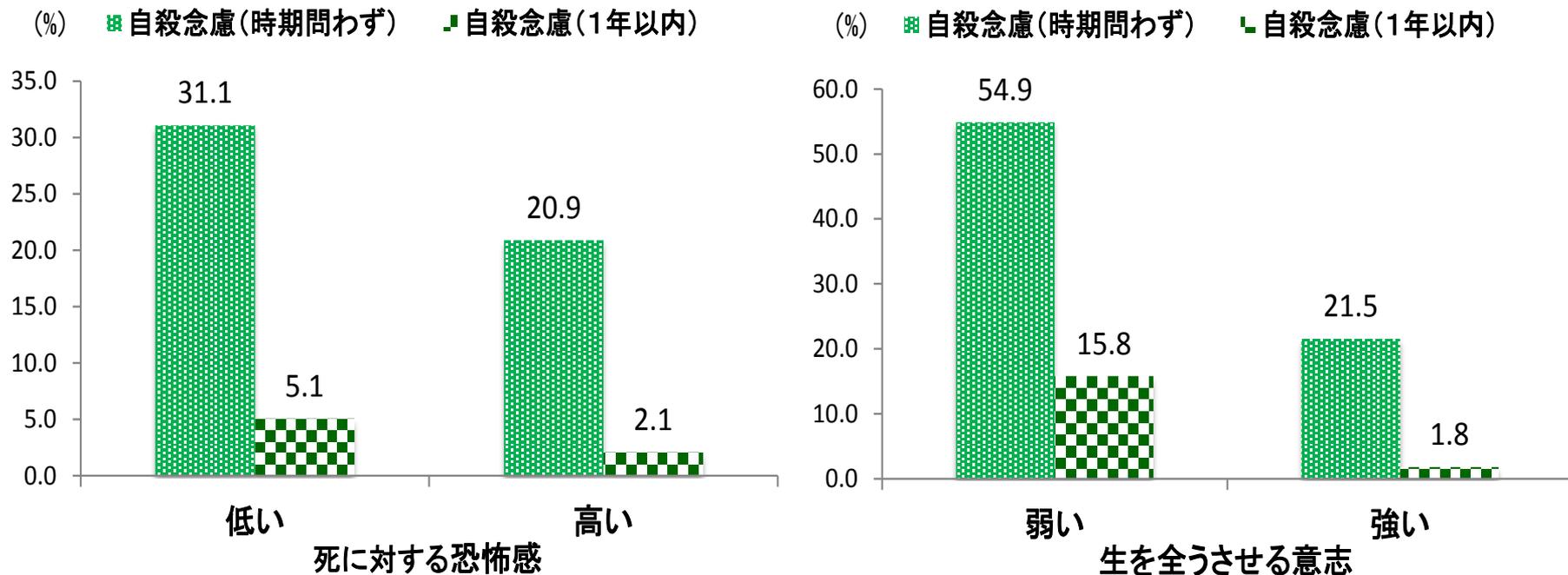
人間同士は理解・共感
できる
できない

<p>A型 情緒的・依存的融合状態 孤独感を感じていない</p>	<p>D型 人間の独自性への理解から 生じる充実した孤独感</p>
<p>B型 理解者の欠如による孤独感</p>	<p>C型 他人からの離絶 無関心・不信</p>



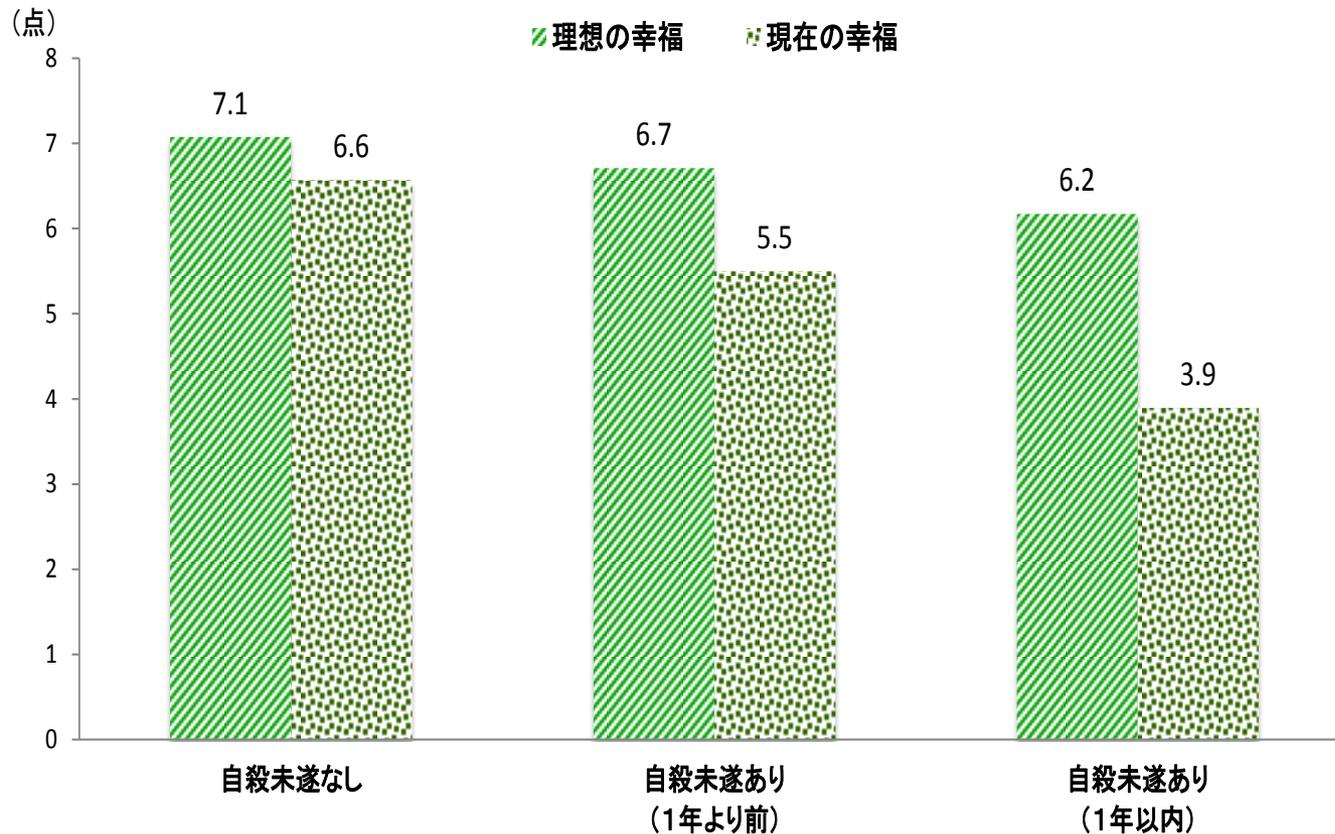
自殺念慮・自殺未遂のハイリスクグループ 死生観

死に対する恐怖感が低い人(31.1%)
生を全うする意思が弱い人(54.9%)



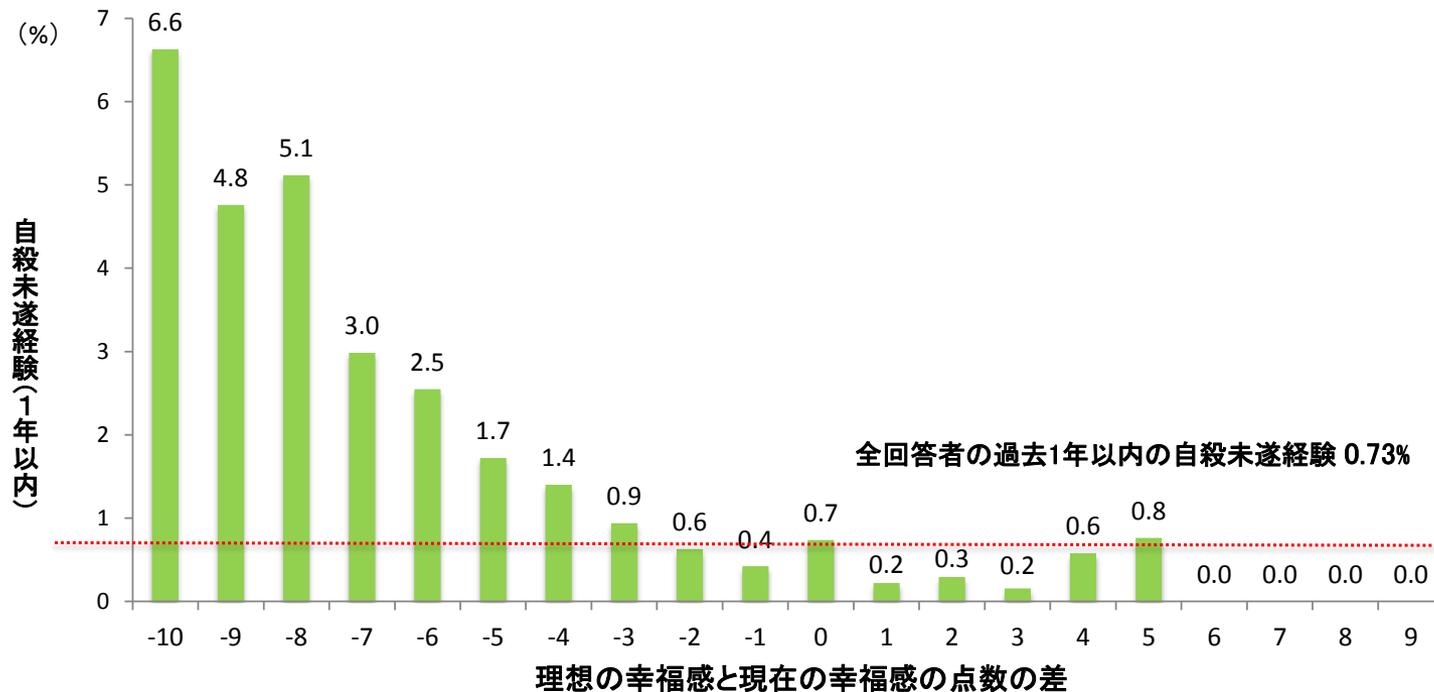
自殺念慮・自殺未遂のハイリスクグループ 理想と現実の幸福感に差

自殺未遂経験の有無で、理想の幸福感の相違は小さいが、現在の幸福感に大きな相違



自殺念慮・自殺未遂のハイリスクグループ 理想と現実の幸福感に差

自殺未遂の経験者(1年以内)は
「理想の幸福感」と「現在の幸福感」の差が大きい



(左)現在の幸福感が理想よりも低い ← → 現在の幸福感が理想よりも高い(右)

若者層(20~39歳)は最も自殺念慮・自殺未遂のリスクが高い世代

20~39歳の自殺念慮: 34.5%(時期問わず)(全世代: 25.4%)
20~39歳の自殺未遂: 1.28%(1年以内)(全世代: 0.6%)

就業状況別における若年層の自殺未遂経験(1年以内)

学生で仕事もしている 4.1%

在職中だが休職している 2.6%

無職で仕事をしたいと思っていない 2.3%

無職で休職中 2.2%

雇用形態別※における若年層の自殺未遂経験(1年以内)

会社役員(会長・社長等も含む) 4.8%

内職 2.7%

自家営業の手伝い(家族従業者) 2.5%

※現在無職の人を含む(その場合、前職における雇用形態を適用している)

若者層(20~39歳)は最も自殺念慮・自殺未遂 のリスクが高い世代

自殺未遂経験(1年以内)のある20~39歳が
直面していたライフイベント(他年代との比較)

男性

進路の悩み
家族等による
虐待
職場・学校の
人間関係不和

男女共通

進路に関する悩み
精神疾患
(うつ病以外)
家族等による虐待
家族関係の不和
職場や学校での
人間関係の不和

女性

精神疾患
(うつ病以外)
家族関係の
不和

自殺のリスクを高める主な要因(調整済オッズ比)

※自殺未遂経験者(1年以内)と自殺未遂経験がない人との比較

<現在の要因>

- | | | | |
|------------------|------|--------------|------|
| 1) 家族等からの虐待(被虐待) | 2.48 | 5) 家庭内暴力 | 1.33 |
| 2) 家族の死亡 | 1.60 | 6) アルコール依存 | 1.31 |
| 3) 職場や学校でのいじめ | 1.59 | 7) 負債(多重債務等) | 1.27 |
| 4) 生活苦 | 1.39 | | |

<過去の要因>

- | | | | |
|------------|------|------------|------|
| 1) アルコール依存 | 1.96 | 4) 職場環境の変化 | 1.31 |
| 2) 薬物依存 | 1.68 | 5) 事業不振 | 1.27 |
| 3) 被虐待 | 1.49 | | |

自殺の危機要因(自殺のリスクを高める要因)

自殺のリスクを高める過去・現在の要因の組み合わせ

(調整済オッズ比)

※自殺未遂経験者(1年以内)と自殺未遂経験がない人との比較

1) 被虐待(過去) + 被虐待(現在) + 家庭内暴力(現在) 72.34

2) 被虐待(過去) + 生活苦(現在) + アルコール依存(現在) 26.74

3) 被虐待(過去) + 被虐待(現在) + 家族の死亡(現在) 10.39

4) アルコール依存(過去) + アルコール依存(現在) + 生活苦 3.02

5) 被虐待(過去) + 被虐待(現在) + 生活苦(現在) 2.10

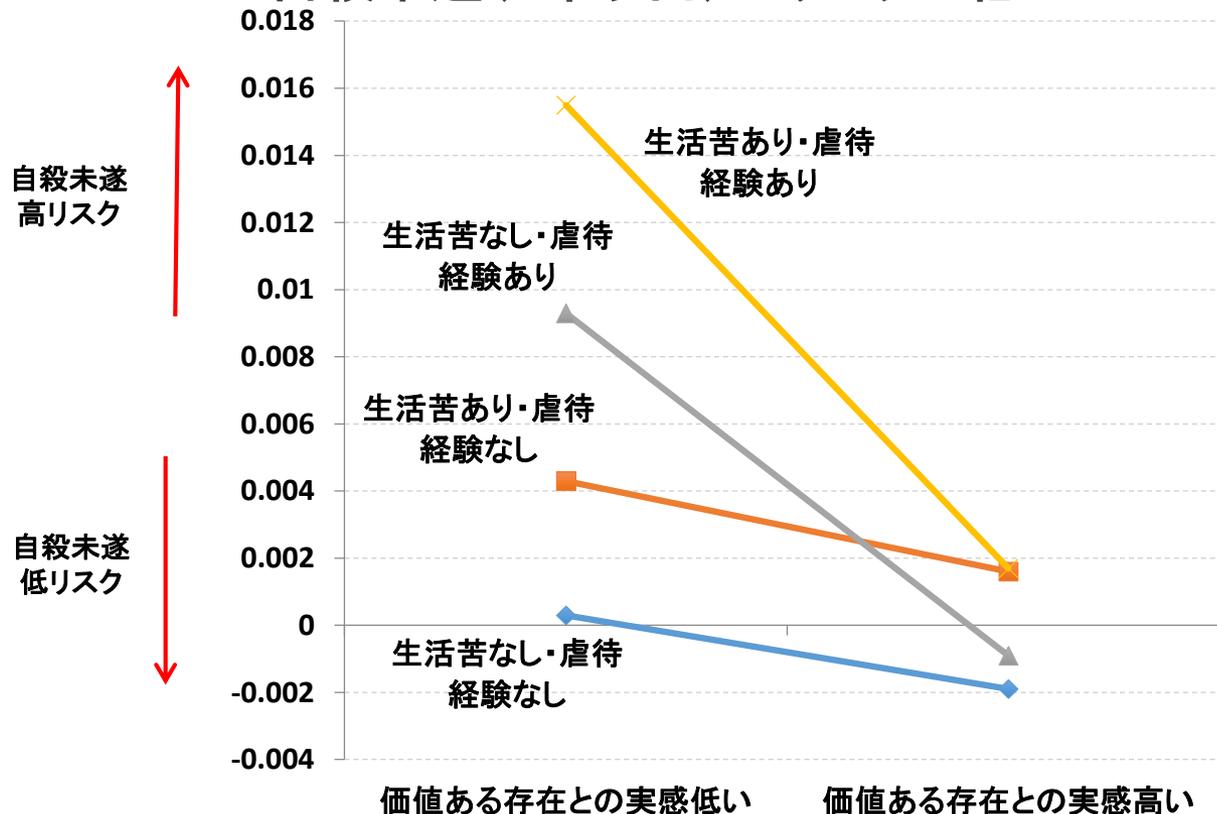
自殺の危機要因を抑える要因は

自己有用感
社会問題解決能力
共感力

自殺の抑制要因(自殺のリスクを抑える要因)

家族に居場所がある(家族の中での「自己有用感」が高い)
質問 16-1,17: 自己有用感尺度(栃木の子どもの自己有用感調査)より

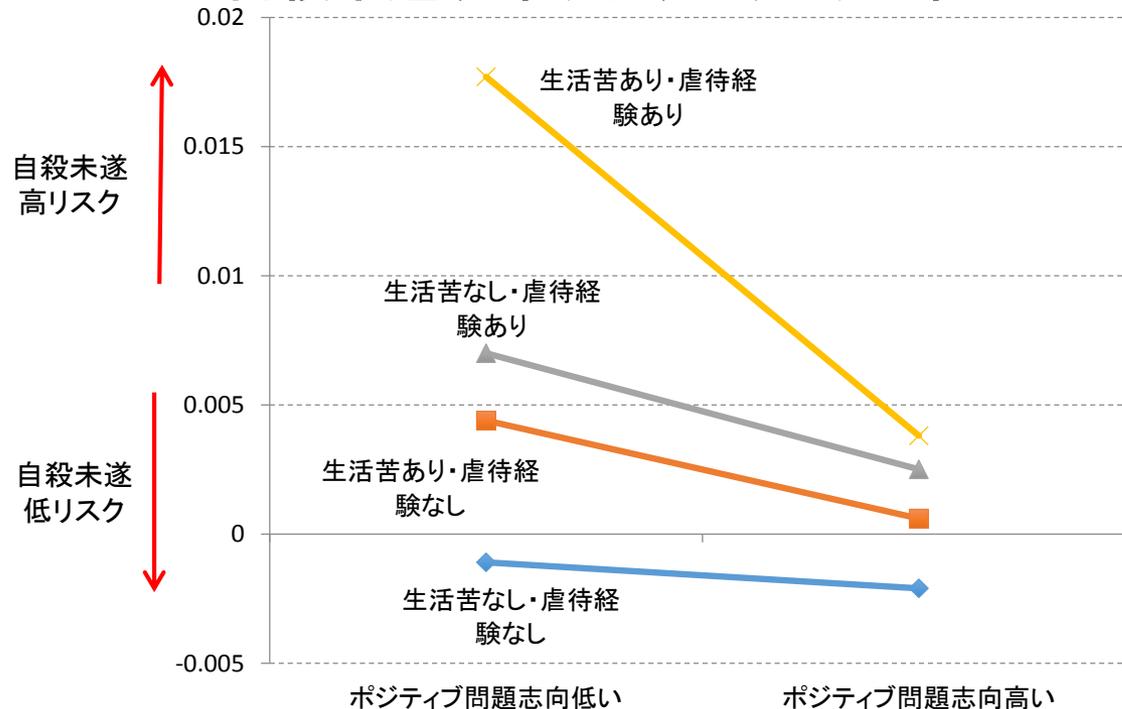
自殺の危機要因(過去の被虐待+現在の生活苦)があっても
自殺未遂(1年以内)のリスクが低い



自殺の抑制要因(自殺のリスクを抑える要因)

「自分には問題を解決できる能力がある」という
 ポジティブな問題志向(「社会的問題解決力」)が高い
 質問18,19: Social Problem Solving Inventory – Revised (SPSI-R)より

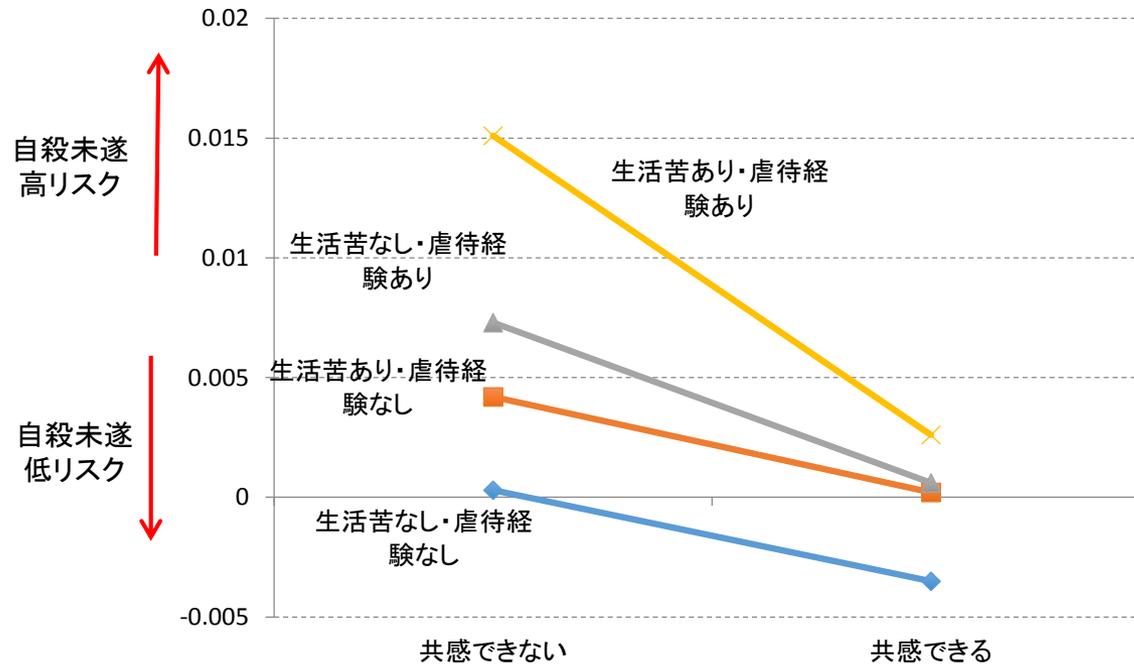
自殺の危機要因(過去の被虐待+現在の生活苦)があっても
 自殺未遂(1年以内)のリスクが低い



自殺の抑制要因(自殺のリスクを抑える要因)

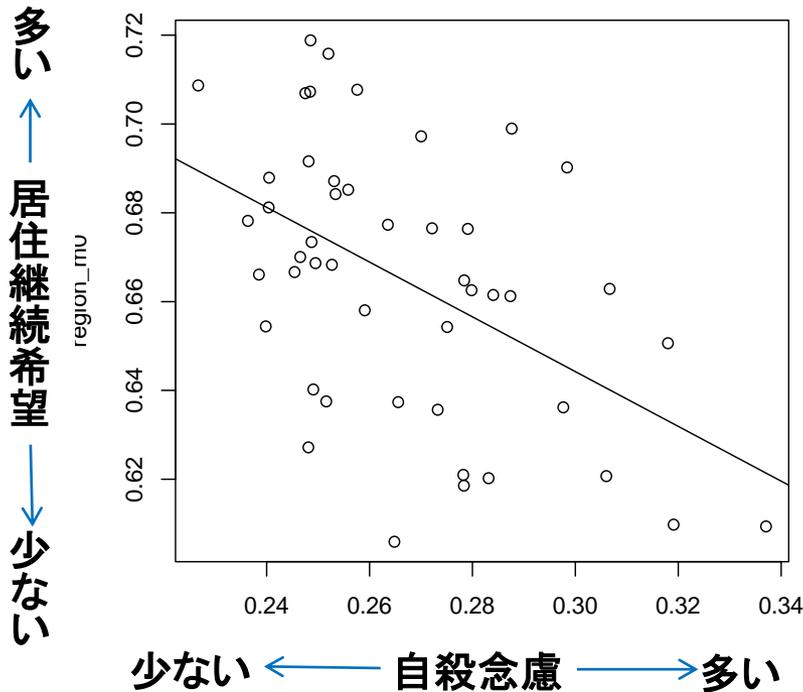
「人間同士は理解や共感ができる」と考えている(「共感力」がある)
 質問 6,7: 孤独感の類型判別尺度(LSO)より

自殺の危機要因(過去の被虐待+現在の生活苦)があっても
 自殺未遂(1年以内)のリスクが低い

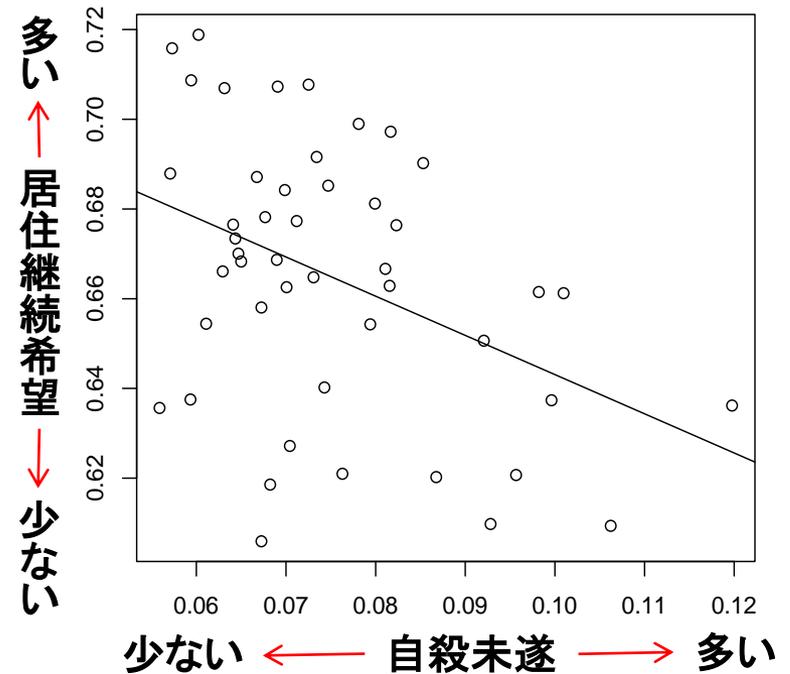


住み続けたい人が多い地域は 自殺念慮や自殺未遂のリスクが低い地域

その地域に住み続けたいという人が多い地域は
本気で自殺したいと思ったことがある人(時期問わず)や
自殺未遂経験者(1年以内)が少ない

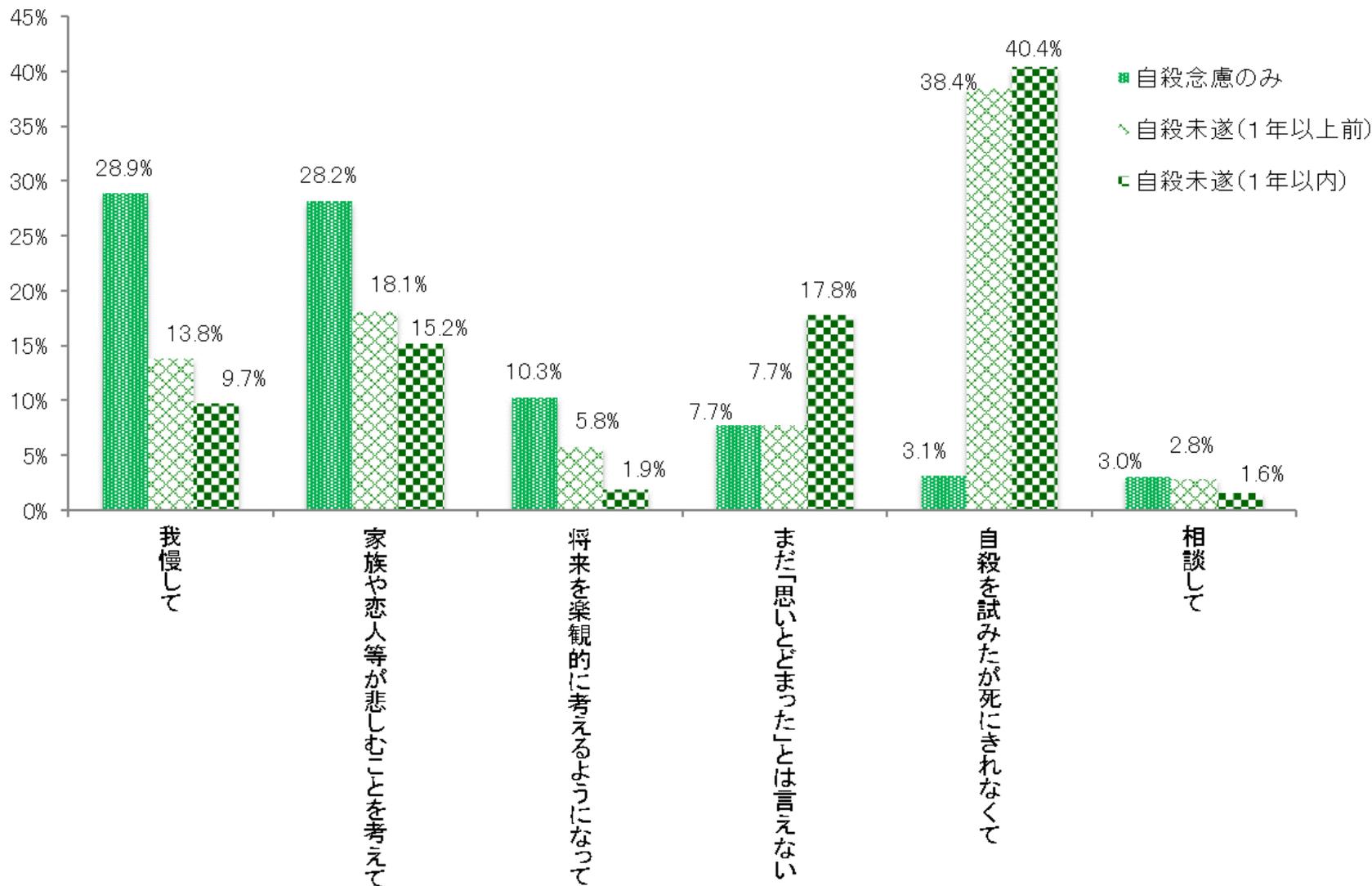


自殺念慮の有無



自殺未遂の経験

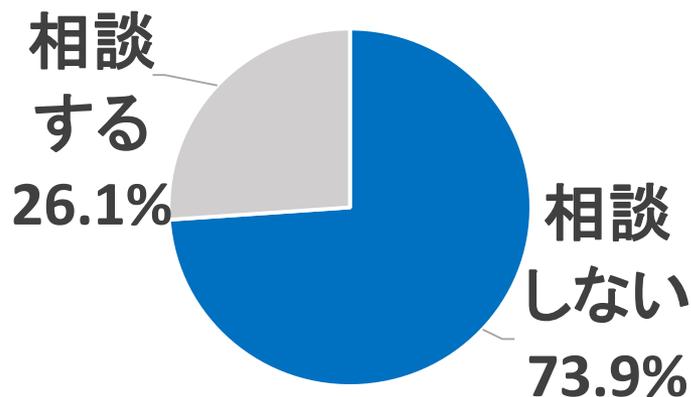
自殺念慮や自殺未遂を思いとどまった理由



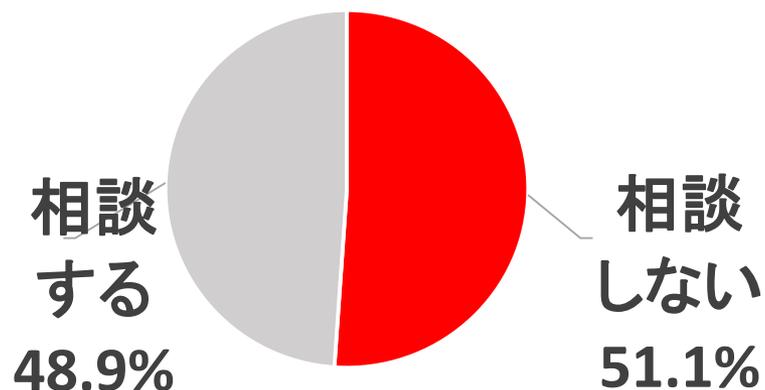
半数以上が自殺念慮や自殺未遂を 経験しても相談しない

「本気で死にたいと思っても相談しなかった」 73.9%
「自殺未遂をしたときに相談しなかった」 51.1%

自殺念慮あり(時期間わらず)



自殺未遂経験あり(1年以内)



自殺対策の方向性への提言

1 社会全体の課題として自殺対策に取り組む

2 「生きることの包括的な支援」として自殺対策を推進する

3 様々な分野の関係者が連携して総合的に対策を行う

4 若年層や自殺未遂者など
自殺のハイリスクグループへの支援を強化する

5 誰にとっても「生き心地のよい地域」を作ることが
自殺対策につながる